

令和5年度 第2回学校関係者評価委員会 自己評価についての講評

2024.2.20

百石幼稚園2階会議室にて

- ・参加者名 松山 勉 (百石小学校校長)
- 吉田 絹恵 (社会福祉奥入瀬会 副施設長)
- 高橋 儀行 (百石幼稚園父母の会会長)
- 鈴木 京子 (あじゅまる会 事務局) 当日欠席

鈴木 康弘 (八戸短期大学幼児保育学科講師) 特別参加

講評

・幼児のみならず、「安心・安全」が教育には不可欠である。非認知能力も必要となってくる(子どもの我慢強さ)。

本日の活動では大人の介入なしに子ども同士での取り組み「子どもの学び」が見てとれた。また、活動のみならず、以上児での話し合いの場でも、年齢問わず発言することができていた。その発言に対して周囲の子ども受け入れる姿が見られた。まさに安心して生活していること感じられ、職員からも子どもを認めて保育を展開させる姿が見られた。

今後の課題として、幼・保・少連携として幼稚園でやっていることをどう引き継ぐか、そして、幼児施設同士の横のつながりを強化し小学校へ引き継ぐことが次の課題と思われた。

・21世紀の保育が行われていた。今国では子ども主体の保育はもちろん、教諭の主体性についても求めていこうという動きがあるが、百石幼稚園の保育はすでにその内容を凌駕しており、驚きをもって参加できた。

また、経営・教育方針が形骸化しているところもまだまだ多い中で、方針を実際の保育に生かし見える形で示されていることも素晴らしい。

・異年齢が自然な形で溶け込んでいた。

子どもが安心してそこで生活し、安心の上で探求心がでてくるので普段の生活が大事であると思っているのだが、まさに普段の生活が垣間見られた。

小さければ小さいほど。子どもが安心して生活することが基盤である。活動についても職員が「保育のねらい」を共有できていると思った。

・聞こえてきた声がおおよそ子どもの声だったことに驚いた。

大人の指示の声は聞かれず、まさに子どもが主体的に活動を展開できていた。

・異年齢の子どもの会話を聞いていて、自分の意見が素直に言える環境であると感じ子ども同士の信頼関係が構築されていると思った。相手を思っている発言、したいことを自分の言葉で伝えられる環境が構築させていたように思った。

幼少期の経験は学童期の基盤となっていく。経験が将来すべき行動の基盤となり、困ったときに助けてもらえる・助けてあげられる等、好ましい人との関りができるように成長していく。1つの保育内容に様々な基盤が入っている保育がみられた。

・あじゅまる会としては、感染関係でなかなか再開できずにいることが残念ですが、他団体の利用の時に子どもの作品を一部展示コーナーを設ける等工夫をしてみたいと考えています。園の活動については、二園での交流の場が実現できお互いに入学してからの楽しみも増え良い機会となったことを嬉しく思っています。

理念があり方針として現場へ生かされ子どもの成長とつながることこそ職員自己評価の数字の結果と考えます。一丸となって毎日の教育保育に向き合っている全職員の姿勢は素晴らしいと感じます。あじゅまる会として少しでも力添えができればと思います。



お店屋さんごっこの様子

